

# 漢方と鍼灸治療に関するの オーバービュー



## 高橋 秀実

日本医科大学 名誉教授/同大学  
付属病院東洋医学科 顧問

たかはし ひでみ

### ■ 略歴

- 1980年：日本医科大学医学部 卒業、同大学付属病院第3内科学教室 入局(消化器病学・肝臓病学専攻)
- 1985年：日本医科大学大学院(博士課程) 修了(医学博士)
- 1987年：米国国立がん研究所 留学
- 1989年：日本医科大学微生物免疫学教室 助手
- 1990年：同大学微生物免疫学教室 講師
- 1994年：同大学微生物免疫学教室 助教授
- 1997年：同大学微生物免疫学教室 主任教授
- 1998年：京都大学ウイルス研究所エイズ研究施設感染制御領域 客員教授
- 2005年：日本医科大学付属病院東洋医学科 部長(兼務)
- 2019年：日本医科大学 名誉教授/同大学付属病院東洋医学科 顧問(兼務)

## はじめに

東洋医学の治療法には、生薬を用いた湯液治療と、鍼灸を用いた鍼灸治療との2種類がある。前者の湯液治療は、草根木皮および石膏や滑石などの鉱物より生体にとって有益な物質群に水分を加え、それを煮出すことによって得た熱水抽出物質を経口的に服用する手法である。筆者らは最近、こうした熱水抽出物質中に含まれる生薬由来の多糖体脂質(flavonoid glycoside)が生体調節に関わる自然免疫システム、ことに $\gamma\delta$ 1型T細胞に影響することを見だし報告<sup>1)</sup>した。この $\gamma\delta$ 型T細胞は、体表面、ことに皮膚や粘膜に配置され、エネルギーのもとであるコレステロールや脂質によって活性化されることが解明されつつある。実際、 $\gamma\delta$ 2型の $\gamma\delta$ T細胞が、コレステロールの前駆物質であるIPP(isopentenyl-pyrophosphate)によって活性化されることが、ハーバードのグループによって報告<sup>2)</sup>されている。

このように、自然免疫システムの実行部隊であ

る $\gamma\delta$ 型T細胞の活性化が生薬由来の、エネルギー(気)に対して影響を及ぼす物質群によって誘発されるならば、鍼灸の治療標的の1つが、 $\gamma\delta$ 型T細胞といった体表面の自然免疫システムであると想定される。こうした方面からの鍼灸治療の意義は、皮膚における $\gamma\delta$ 型T細胞の活性化であり、鍼灸治療の「ツボ」とは、鍼や灸により皮膚に局在する $\gamma\delta$ 型T細胞の溜まりを指し、鍼による痛覚刺激あるいは灸による温熱刺激を介した $\gamma\delta$ 型T細胞の刺激活性化が鍼灸治療の実体と考えることもできよう。今後、「ツボ」と呼ばれる部位に $\gamma\delta$ 型T細胞が集積しているか、あるいは「ツボ」の刺激により $\gamma\delta$ 型T細胞の活性化が実際に誘発されるかが検証されることになるであろう。

いずれにせよ、筆者は、生態調節の実行部隊である $\gamma\delta$ 型T細胞が生薬を用いた湯液治療ならびに鍼灸治療の標的であり、その活性化こそが東洋医学の作用機序であると考えている。

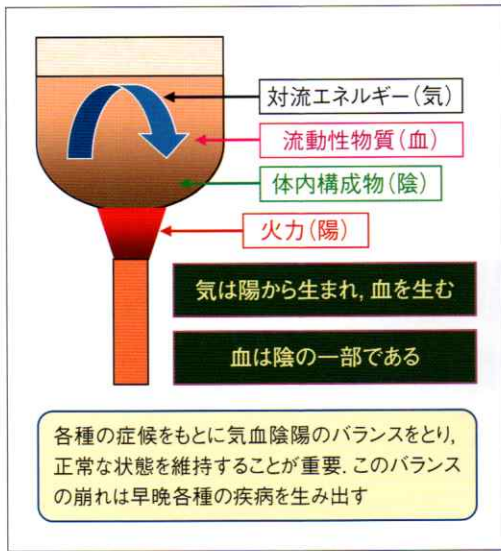


図1 気血陰陽(筆者作成)

## 東洋医学の作用と作用点

図1に示すように、生体は火力(陽)によって温められた「風呂」のような状態であり、この火力によって「風呂」内の水が湧き上がり「湯」となる。この湯が湧き上がるための対流エネルギーが「気」であり、この「気」は火力によって生まれる。対流エネルギーによって体内を流動する物質群が「血」あり、体の構成成分はこの流動性物である「血」と、非流動性物質群からなる。そして、非流動性物質と「血」とを合わせた体の構築物を「陰」と呼ぶ、このような「気」、「血」、「陰」、「陽」が体内の構成成分であり、それらの不足状態が「虚」と呼ばれる病的な状態、すなわち「気虚」、「血虚」、「陰虚」、「陽虚」の状態を引き起こす。こうした「虚」の状態の改善が治療には必要で、その改善のために湯液および鍼灸治療の意義が認められる。

## 気血陰陽の変調によって誘発される各種症状の実体

以下に気血陰陽の変調が引き起こされる原因と、それぞれの特徴的な症候を列挙してみたい。

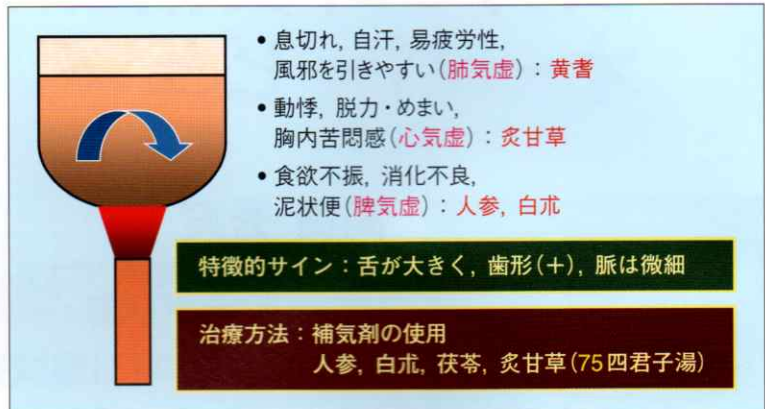


図2 気虚の症状(筆者作成)

### 1. 気虚症状の誘発因子

気虚を誘発する因子には、火力の低下である「陽虚」症状、消化機能の低下である「脾気虚」、さらには呼吸機能の低下である「肺気虚」、そして循環機能の低下である「心気虚」などの症候が知られている。ここでの「脾」という言葉は消化器系を示す。図2に示すように、「脾気虚」に伴う食欲不振、消化不良、泥状便に対しては「人参」や「白朮」が使用され、「肺気虚」に伴う息切れ、自汗、易疲労性、易感染性などに対しては「黄耆」が、そして「心気虚」に伴う動悸、脱力・眩暈、胸内苦悶感に対しては「炙甘草」が使用されている。

### 2. 血虚症状の誘発因子

血虚を誘発する因子には、慢性失血や鉄欠乏に伴う「貧血症状」や肝機能低下に伴う「肝血虚」症状、心機能の低下である「心血虚」などの症候が知られている。このような血虚症状は、同時に気虚症状を生み出すことは知っておく必要がある。図3に示すように、「肝血虚」に伴う顔色不良、爪がもろい、手足がしびれる、筋肉の痙攣、生理不順、眼精疲労、皮膚の痒みに対しては「白芍薬」や「当帰」、「熟地黄」が使用され、「心血虚」に伴う頭のふらつき、不眠、動悸、健忘などに対して



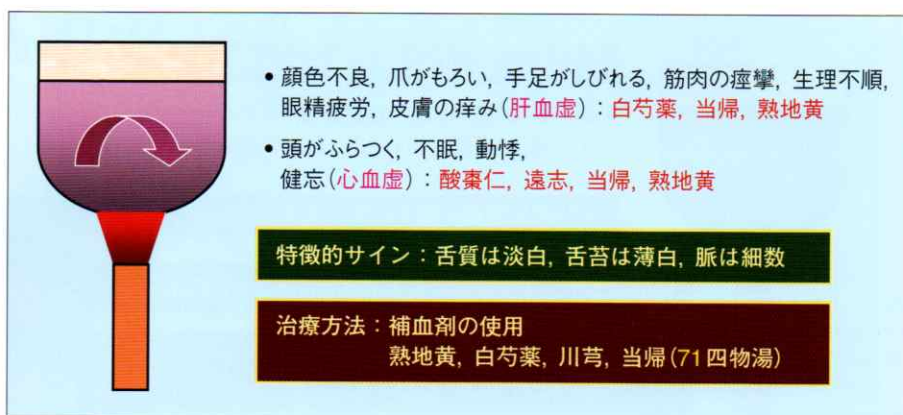


図3 血虚の症状(筆者作成)

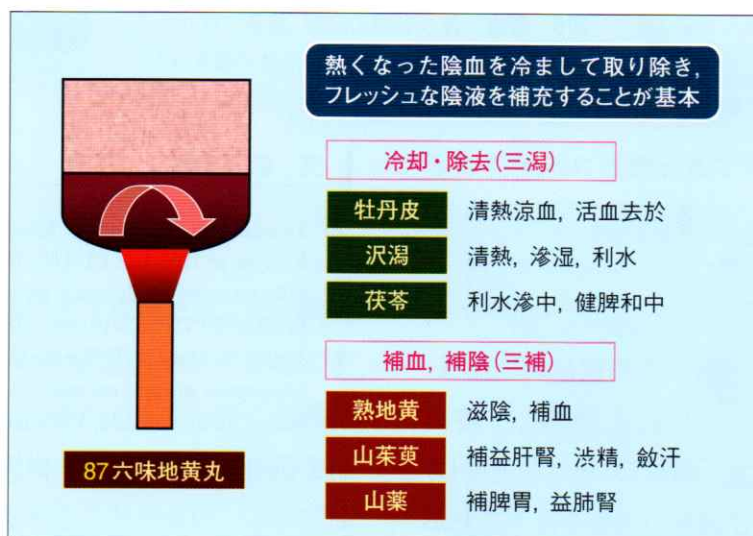


図4 陰虚に対する治療法(筆者作成)

は「酸棗仁」, 「遠志」, 「当帰」, そして「熟地黄」が使用される。

### 3. 陰虚症状の誘発因子

陰虚を誘発する因子には, 慢性感染症や慢性疲労に伴う「陰血不足」に伴う顔面紅潮, のぼせ, 寝汗, 手のひらや足裏のほてり, 口渇, 動悸, 不眠, 便秘などの症候が知られている。甲状腺機能亢進状態が本症状に類似している。この場合は, 補陰剤として熟地黄, 生地黄, 麦門冬, 天門冬, 玄参, あるいは図4に示すように, 熱くなった陰

血を冷却し(三瀉), フレッシュな陰液補充を考慮した(三補)の六味地黄丸などが用いられる。

### 4. 陽虚症状の誘発因子

図5に示すように, 陽虚を誘発する因子には, 甲状腺機能低下に伴う「陽の不足」による慢性的な四肢の冷え, 顔面蒼白, チアノーゼ, 夜間の尿量過多, 泥状~水様便などの症候が知られている。甲状腺機能低下状態が本症状に類似している。この場合は補陽剤として附子, 鹿茸, 杜仲, 冬虫夏草, 紫河車などの補陽薬を用いる。このような状

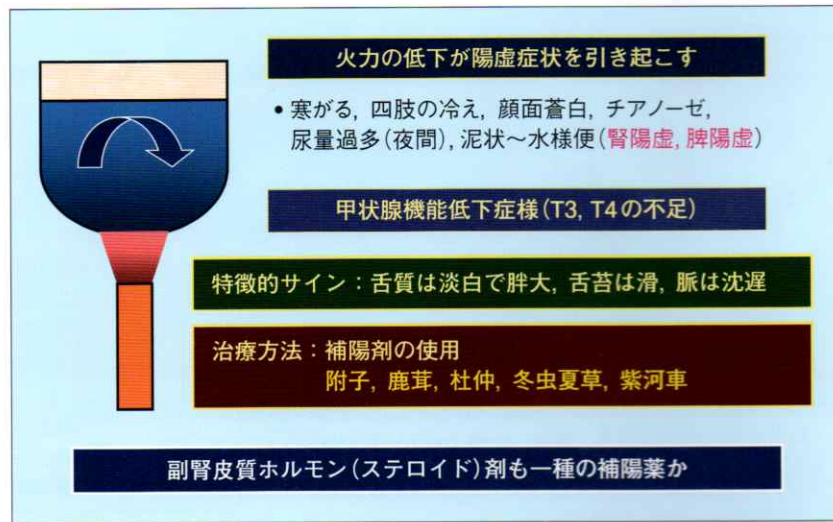


図5 陽虚に伴う各種の症状(筆者作成)

T3: トリヨードサイロニン, T4: サイロキシ

況には, 強力な補陽剤である糖質コルチコイド(ステロイド薬)も用いられる。

## おわりに

上述したように, 東洋医学の治療においては, 体内の「気」, 「血」, 「陰」, 「陽」を調整し, 特に「気虚」, 「血虚」, 「陰虚」, 「陽虚」の状態を把握し, それに対する生薬および鍼灸の治療を行うことが最も重要である。気血陰陽の状態を把握し, 適切な湯液治療および鍼灸治療を行い, 生体のバランスをとることが大切である。

## 文献

- 1) Yonekawa M, Shimizu M, Kaneko A, et al : Suppression of R5-type of HIV-1 in CD4 (+) NKT cells by V delta 1 (+) T cells activated by flavonoid glycosides, hesperidin and linarin. *Sci Rep* 9 : 7506, 2019. doi : 10.1038/s41598-019-40587-6
- 2) Tanaka Y, Morita CT, Tanaka Y, et al : Natural and synthetic non-peptide antigens recognized by human gamma delta T cells. *Nature* 375 : 155-158, 1995. doi : 10.1038/375155a0

## MEMO